

70 就労移行支援（養成施設）利用者に対するケースワーカーの支援実績データ結果報告

総合相談支援部 総合支援課 石森伸吾、小出千鶴子、水鳥政喜、田代優子、堀美貴子

【はじめに】

ケースワーカーの支援実績については、ケース記録によって記録され、数値データとして蓄積することは少ない。平成24年度より就労移行支援（養成施設）利用者に対するケースワーカーの支援量を数値データ化することを目的に、支援実績データの蓄積を開始した。今回、平成26年度の支援実績データから就労移行支援（養成施設）利用者の傾向等について報告する。

【対象・方法】

対象：平成26年4月～平成27年3月に利用していた独自事業を除く、就労移行支援（養成施設）の全利用者82名

方法：ケース記録を兼ねた支援実績データの集計フォーマットに、各担当ケースワーカーが入力していた支援実績の対応時間を集計した。

支援実績データを、学年別（1年、その他学年、卒業学年）に課程（高等・専門）、視覚状況（全盲・弱視）、利用形態（入寮・通所）の平均対応時間をもとに比較した。また、全体の平均対応時間を超える利用者の傾向について検証した。

【結果】

全体の結果として、平均対応時間は卒業学年が一番多く、次に1年、最後にその他学年という結果であった。また、全利用者の平均対応時間は、17時間23分であった。

1 グループ別の平均対応時間

（1）学年・課程：1年、その他学年では高等課程が多く、卒業学年では専門課程が多かった。

（2）視覚状況（全盲・弱視）：全学年において全盲が多かった。

（3）利用形態（入寮・通所）：全学年において入寮が多かった。

高等課程、全盲、入寮のグループに支援を要する傾向が見られた。卒業学年の対応時間については、専門課程のほうが就職活動に係る対応時間がやや多かったため、高等課程と専門課程の対応時間に逆転が見られた。

2 平均対応時間を超える利用者の傾向

平均対応時間を超える利用者は、27名であった。対応時間が増えた要因として想定されるものとしては、①卒業学年への進路指導等の対応、②宿舎生活・訓練への不適應の対応、③休所・利用解約の対応、④1年生の新環境適應への対応であった。卒業学年は全般的に対応時間が増加し、②、③の場合に対応時間が増加する傾向が見られた。

【考察】

日々の支援を数値化することにより、改めて利用者への支援実態を確認することができた。

しかし、集計作業を通して、ケース記録を兼ねた入力フォーマットのため、入力者による差やケース記録に記録を要さない、日々の小さな支援がデータとして拾い切れていない様子も見られた。そのため、今後、継続にあたっては、項目や入力方法等の見直しが必要になると考えられる。